



ユニセフT・NET通信 「平和の中へかかるとき」の 資料を使用した道徳の授業

報告者 東京都練馬区立豊玉南小学校 海野 あい先生

ポイント

6年生の児童が、社会で戦争について学び、その悲惨さについて調べ学習をし、平和の大切さを学んできた。また、今も戦争を続けている国があることや、「国境なき医師団」「ユニセフ」「国連平和維持活動」などの存在があることも学んできた。

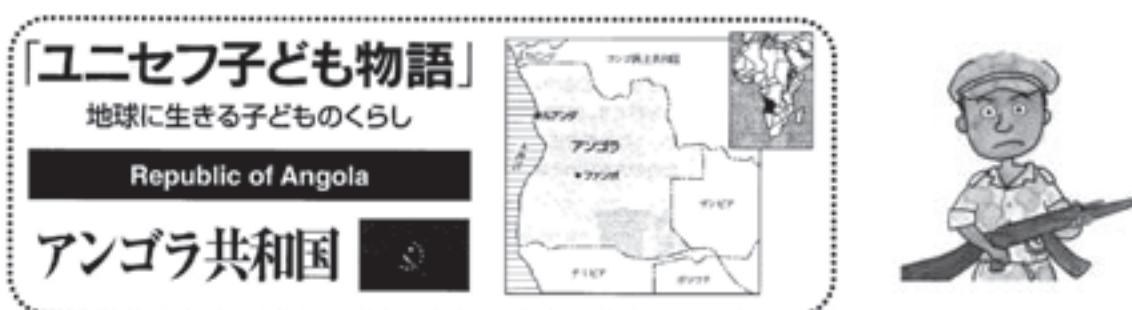
しかしそれらは世界のどこかで起こったことであり、ニュースやテレビの中の話としか感じられない。この「平和の中へかかるとき」の話を読んでもあまり現実感無く感じてしまうかもしれないと思った。そこで、わたしが日々当然のこととして感じているようなことを思い起こさせ、この物語に出てくるゲルバシオにとっては、銃を持って戦うことが日々の中で当然となっていること、「平和」がどんなものかわからないということの意味をよく考えさせることから始めた。

あまりにきつい内容であったために、細かく心情を追うよりもゲルバシオの置かれた状況を理解させ、自分たちと同じような年代の子がそのような状況にいることを考えさせようと考えた。そして、「かわいそう」「自分たちは平和な国に生まれてよかった」という考えではなく、世の中には平和とはほど遠い国がまだたくさんあることを知り、その人たちの身になって考える機会をもたらすこと、そして自分たちに少しでもできることはいかを考えさせるきっかけにしてほしいと願ってこの授業を行った。

実践

- (1) 主題名 地球に生きる子ども 4-(8) 国際理解と親善
- (2) ねらい 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重していこうとする心情を育てる。
- (3) 資料 「平和の中へかかるとき」について

本資料は、日本ユニセフ協会が発行している「ユニセフT・NET通信」No8にあるユニセフ子ども物語の「平和の中へかかるとき」の資料である。



アンゴラの少年ゲルバシオは11歳の時から少年兵だった。銃を持たされ、大人のために食事の用意や洗濯もしていた。家族も皆戦争のせいでバラバラになり、軍隊から追い出されたらひとりぼっちになっ

てしまう。周りの友だちもたくさん命を失い、そんなことが身近で起こり続けるうち、ゲルバシオは感情をも失ってしまった。

戦争が終わりキャンプに入ったゲルバシオは字を学んだり、自分の経験や将来のことを語るプログラムに参加したりするうち、一緒にいる友だちもでき少しづつ温かい気持ちを取り戻すという内容である。

(4) 展開の大要

	学習活動	指導上の留意点
導入	1. アンゴラという国の場所を知り、知っていることを話したり、どんな国か想像したりする。	・日本とは遠い国の話であることを知る。
展開	2. 「平和の中へかかるとき」を読んで話し合う。 ①自分の家族や友達が次々に命を失っていくなかで ゲルバシオは、どんな思いだったでしょう。 ②戦争が終わりキャンプで読み書きを勉強し、ポスターの文字が読めたとき、どんな思いだったでしょう。 ③あの夢の少年は敵じゃない、弟のアントニオだ。 そう思い涙が止まらなかったゲルバシオの気持ちを考えましょう。 ④ゲルバシオに感情を取り戻させたものは何だったのだろう。 3. アンゴラの少年兵、アンゴラの内戦のことを知り、自分たちにできることはいかが考える。	・自分たちと変わらない年の子が銃を持って生活し、一人になっていくことを感じさせる。 ・私たちが毎日している当然のことが、気持ちの変化を起こさせていることを考えさせる。 ・周りは全て敵だと考え、感情を押し殺していたゲルバシオのことを考えさせる。 ・戦争ではない毎日、文字が読めるということ、友達に囲まれているということ、つらいときに背中をさすり続けてくれる友達の手、いろんなものがゲルバシオの心をえていったことを感じさせる。
整理	4. 授業の感想を書く	・全員が自分の思うことを書くことで整理できるようにする。

まとめ

子どもたちの驚きの声があったこと、そして児童がたくさんのことを感じたことは大きな成果であった。そこで、今回の学習を振り返るとともにまとめをしておくためにも、この学習内容を、学級通信で知らせることにした。

道徳で、私たちには理解できないような悲しみを味わった少年の話を読みました。戦争の生活しか知らず、殺されるか殺すかの毎日をすごし、家族を失い友だちを失ううちに、感情すら失ってしまったのです。

心を失わせてしまうのも、失った心を取り戻すのも、どちらも人間なのですね。世界には、いろいろな国があります。同じ地球に住むもの同士、みな仲良く平和に暮らせる日が早くきてほしいものです。

